

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 蕭 涵珍

李漁(1611~1680)は、小説『無声戯』『十二楼』、戯曲『笠翁傳奇十種』ほか多くの著作によって知られ、明末清初を代表する流行作家の一人である。斬新な趣向に富むその作品は、後世の中国の作家たちに創作のヒントを与え、少なからぬ影響作があらわれるとともに、日本でもその影響を受けた作品が生まれ、多くの読者を得た。

李漁自身の創作をめぐる第一章では、「男孟母教合三遷」及び「萃雅楼」を中心に、李漁の小説における同性愛描写について論じる。主題の選択や主人公の描写の仕方、物語の重心などの分析を通して、李漁の場合、男色批判というよりも、真情の価値と伝統的礼法とのバランスを取ろうとの試みが見て取れる、とする。従来の「李漁は男色を批判している／いない」という二者択一的な見解に対する新解釈である。

第二章では、李漁作品の中国における影響について論ずる。李漁の戯曲を改編した後世の小説は、原作の内容を踏襲しつつ、いずれも大団円の結末や猥褻な色事の描写を追加している。それは、原作の読者よりも文化レベルの低い読者層を引きつけようとしたため、と分析する。また、改編小説中の二作が、似た題材を扱う小説ではなく、戯曲の方を底本に選んでいる点を指摘し、その理由を、小説と比べた時の戯曲の文字数の多さ、筋の複雑さが、単行本の出版により適していたという点に求めている。

第三章以下は、李漁の作品の日本文学に対する影響について論ずる。第三章では、李漁の戯曲『玉搔頭』を翻案した曲亭馬琴の『曲亭伝奇花釵児』、及び広津柳浪の『絵姿』について。馬琴は単に戯曲『玉搔頭』の話をそのまま日本化したのではなく、新たな趣向を練り上げ、自らの創作意図を巧妙に加えている点、また柳浪の『絵姿』については、適当な分量に話を切り分け、毎回それぞれ面白みをもたせる戯曲の特徴が、新聞連載という新たなメディアの性質と一致しているとの指摘は重要である。

第四章から第六章までは、李漁の小説『十二楼』を翻案した笠亭仙果の合巻『七つ組入子枕』について。『入子枕』は、『十二楼』の中から選び出した五つの話を巧妙に組み合わせ、一つのシリーズにまとめて翻案したものである。この長編作品は、まだ日本でも翻刻されていない作品であるが、物語の筋をきちんと押さえた上で、本来別々であった話に共通する人物を登場させることにより、同じ物語世界にまとめたり、当時の読者に馴染みのある風習や演劇の要素を導入したりといった、仙果のさまざまな工夫のありさまを浮き彫りにした。

李漁の江戸文化への影響に関するより幅広い視点、読者層など社会的背景についての分析等の点にさらなる展開が期待されるものの、李漁の戯曲・小説について、その創作のありさまを、中国・日本にわたる影響を丹念に追った論文として、本論文が博士(文学)の学位を授与するに十分値するとの結論に至った。